

繪本拾遺信長記 三

~ 13  
3564  
16



門 13  
 號 3564  
 卷 16



繪本拾遺信長記後篇卷之三

目録

松永輝正謀叛之事

信長村并に命じて松永が之を討つ

細川五七郎兄弟先陣

羽柴秀吉が松永を討つ

松永久秀の滅亡之事

秀吉が軍兵石山寺に宿りて信長の城の中に入

繪本拾遺信長記後篇卷之三

早稲田 大學 図書館  
 昭 34.6.3 發  
 藏 書

信長山崎城

松永貞徳の先祖

信長雷和幸頼守事

信長石山夷評議

中お信忠御旗州白

幸頼寺評定

荒本美都西石山城に到る

繪本拾遺信長記後編卷之二

松永彈正謀叛事

小田内大臣信長云、紀州の一揆を平げ勢州の乱を静め軍の  
乃いとま暫くもわけて天正五年も秋八月の上旬にはあり  
小つりけ附携津石山へ陣陣と向へり人きの如く石山表天王  
寺の東に在陣也。松永彈正久秀叛送乃企てありて天正  
五年と引拂ひ己が居城大和の信長の城へ揃勢を専合戦  
の用意をぬけ信長表を番の諸大おより信長云へ  
浪進やこれ信長は。石松永が叛心我先より能知れり  
とつとも老功の武者と能と惜んど助けあがり征せ  
どんが叶へはじとく先松井宮内卿法印とて信長の城に

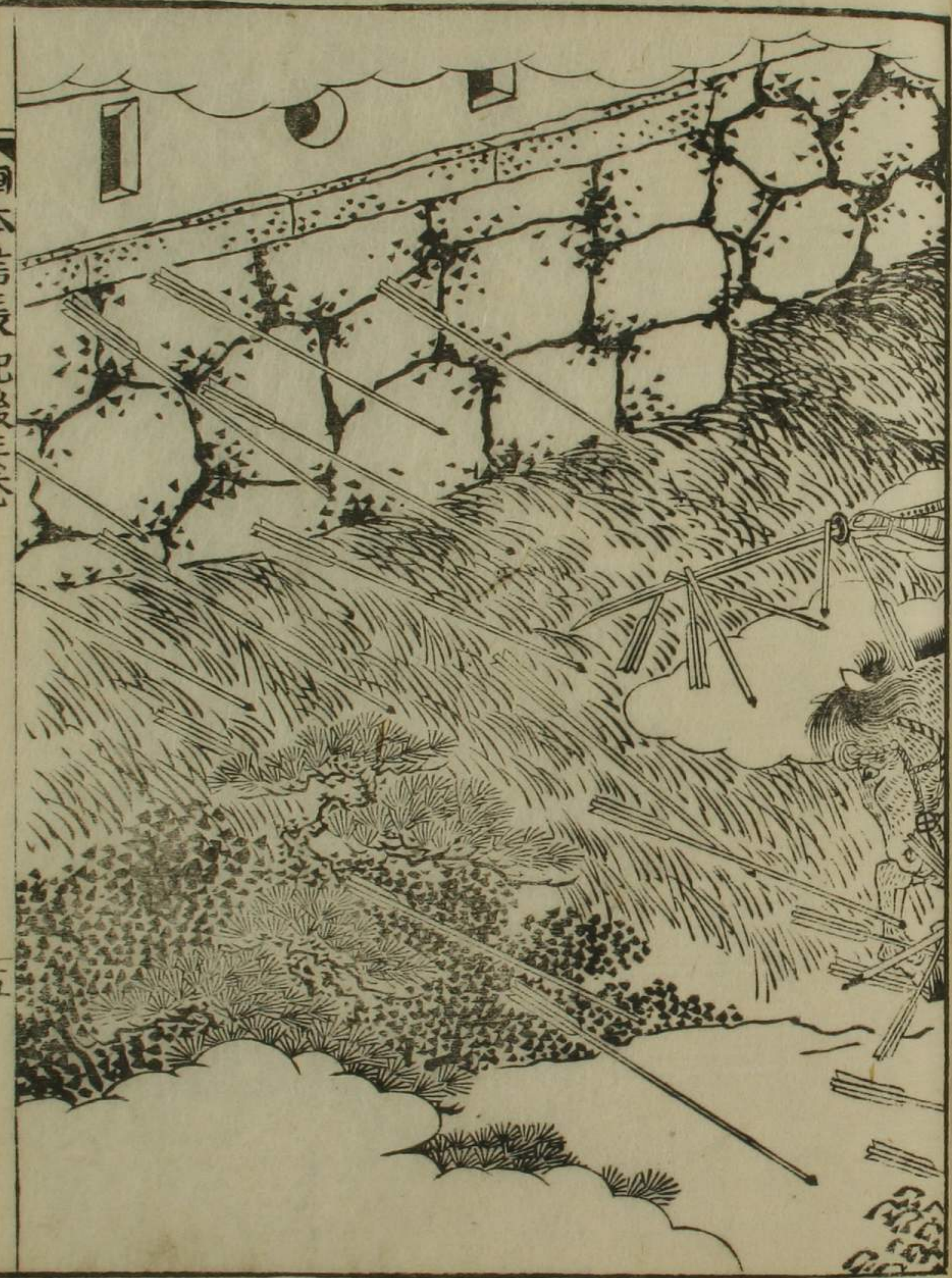


信長のぶなが  
 村舟むらふね 命のみこと  
 松永まつなが  
 人ひと 笑わら と  
 殺ころ し  
 後のち



をいざれ竹中の子細ありて美城の結搦及びひやなま  
 とどれた御易あり多きば松永の一向道心の多きに河渡  
 を城中へ入らば退りしうらむ信長の甚怒り給ひ松永  
 が人質を指し置る時二人京都と引也し事本々様し  
 謀叛人の見せしめせよやとく河目代次郎若七郎後家  
 平九郎門西人々竹渡されたる事ば松永が男十と十二と  
 ありたる成多久間五六郎が籠り置る成引出村舟  
 長門守が署をたてしよ世しよと云しつぬ英事とて梅花の霜  
 と痛むらうとまてんくそと云し又法と落し置られたる子の  
 父が謀叛より失せしむの不便をいふく安と志のびか  
 内裏より入りしよ英の方より命乞と云し給ひ若や助

ろりもみだしとくくと進められどけ男子多路ふだれたる目  
 ろく又謀叛の企しよ我くが死せんゆえすう是悟のゆえ  
 いへ確言命と教るとも父の家滅亡し若の内悪と受る面  
 目のいて世の人と面と對しやべきまうく首と刎らまじし  
 若の内怒りを休めなうんは父が罪科も腫くはまん  
 神とはしく使へくれ長門守大さふ感と落涙教り及び  
 くるが父の方へ英の方の書をも書めよと送り居け得た  
 ばしと現筆を物とあふれど又謀叛と企しよ我くが死刑  
 の是悟のゆえいへ別とて中送らんゆえうはし唯多久間  
 と六郎及日以は是悟の女抱を難く志とがとて多久間  
 が方へ一通の乳状と給し其の翌日兄分二人ひと川車よみ



細川五七郎



細川五七郎  
兄弟  
先陣

せき二条より六条まで引渡さる川原よりかきりし  
 く西へ向ひてと合せ念佛教遍唱する中より方よりし  
 りと白くしるく首と討てたり見物のまじりて霞ひある  
 至愆やくるをきりしき雅児と殺し謀叛と企てりとも  
 いくぐりかきと遂にたや麻のうら松永が計なりと歎息せ  
 ざる者ありは九月廿七日松永父子退治のふとく小田城  
 之助信忠卿と大おとし降ひ来りける軍おろは細河兵  
 部をまはし降惟任日向守先香侍舟帆芝等数万騎の軍  
 兵と強備く大和路にしておろさるる安よ松永が一味よ力の  
 武士本森海老名るといふ者とも河内國行國の城を捕  
 獲りて怨敵のまはりけりしまは先け歎を二踏ふるとしりせ

よとく十月朔日未明より柳奇喚き叫ぶ妻とらるる細  
 河及渡が嫡子と七郎此時十又歳其の弟治郎十又歳  
 兩人共先よ馬と進み城戸に近く妻付より城の中より兵弓矢  
 炮と向うく飛し安と途途と防ぐ程に細河が家の子良  
 等もいそぎ殿を討せり叶ふまじし續けやつけと叫びて  
 我先よ弛向ひ雨よりまげき矢玉と拂ひらんかく本戸と  
 おぼしめし見分の人々も能首とく勝國と門とらげたりる  
 明智光秀の侍舟帆芝等と見てあの見分がふるまひを  
 見と恥ざるやうやみんきこれやど乃小旗とつ門まで討た  
 うつたるる系や若ともお入や芽と自ら先よ馬とつけ  
 けしきびしく下加して攻まはけ時熱軍隊と吹立令被

と鳴しし川きつとて入る小城中の兵も義と鉄石の志  
とく固り命の塵埃すりも煙くはし一足も引かおれくを  
防ぎまるとつても多勢のしせも荒らと入替責清とい終  
又防ぎ守るべき力劣とてお森海老名も中丸へうけて腹  
十文字よと撥切て却より多る小隊兵をひくは討死し其日の  
甲冠既又燃い為りり信忠御軍率の劣と称し爰は雨  
日休足あり石山左衛門の内より羽柴流石守あり去る間  
右衛門尉信盛輝を兵庫次郎澄を召せり軍勢と併せ  
日月三日信美の燃又押寄山下の民屋と焼拂ひ昼夜のこと  
ういもなく喚き叫んを奏りり松永元来世は獄する老  
婦の武よりしが後りり下知と加へ大本を扱け大石と焼

いけまびしく防ぎ戦へいあり大軍とともども敢て澄謀へし道  
ありし終りぬ北傷の者ありりい奏あぐんでぞ月久まらる羽  
柴流石守あり石山の林麓山の上方溪と隔て陣と立しは八日の  
夜守斗曲者一人と搦えりり秀あり彼者の懐中と探らしむ  
る小松承が石山中へ加勢と乞書状なり其文と曰く  
不待まれ甘心無限候野生雖も不肖被撰就  
團之申頗英傑之知振舞大志永不可居他人  
之下位忽發大志信長及合戦候年雖而も  
勢不能破大勢希以中親寺河加勢龍長信長後  
相狭討之保平團款佛款耳

天正五年十月八日

松永彈正少弼久秀の





孫紫房吉  
松永  
密使  
捕る



本願寺軍師

拾本源右衛門尉殿

兵の右をえと見く大さ小款び被思びの若を陣中よきびしく  
捕是大信忠御の御志にいく謀略の次第とも委く言は  
於て陣中へゆり朝野孫平恒尾希刀は計策とや合め其夜密  
に陣中とゆいけ城と系落さんや西三日の向ありと晴又笑を  
合々々

松永久秀の城元

拾まは十月九日に方乃ある一日は備と御行策と並(園)と他  
て美より例よ遠り城の中よりも矢玉と構まばえんぐみ  
防ぎ我小程よ今日も多に死傷の者抄びはしく少攻に

と退き矢軍のそよ耐と後しぬ其日の書方西出の方より又十  
騎升軍兵南五石可思後先如来の白旗押之羽柴秀吉  
が陣中と一文字は斬開きつと押通ひく城門近く進み来  
る松永是と見く本願寺の援兵早く城の中へ迎へ入ると  
城戸を開ひく入りたる羽柴惟任が両勢さのせと進来るは  
早く城門を閉矢倉くより弓鉄炮と打ちぬる雨の下く  
ある進みよて退きぬ耐よ本願寺の軍お松永が志に後  
て歸き其い本願寺の門後橋右門とや若よその軍師重  
幸日未美若の武功をえい本願寺よ松きせむが職を  
松永氏よ後し幕中の二おとゆりて功を励めき小款多とゆ  
て鋒先と兼んりこそ本願寺にあはれとや致く歎息してあり

秀吉が軍兵

石山勢

仍

信長乃

城中心入





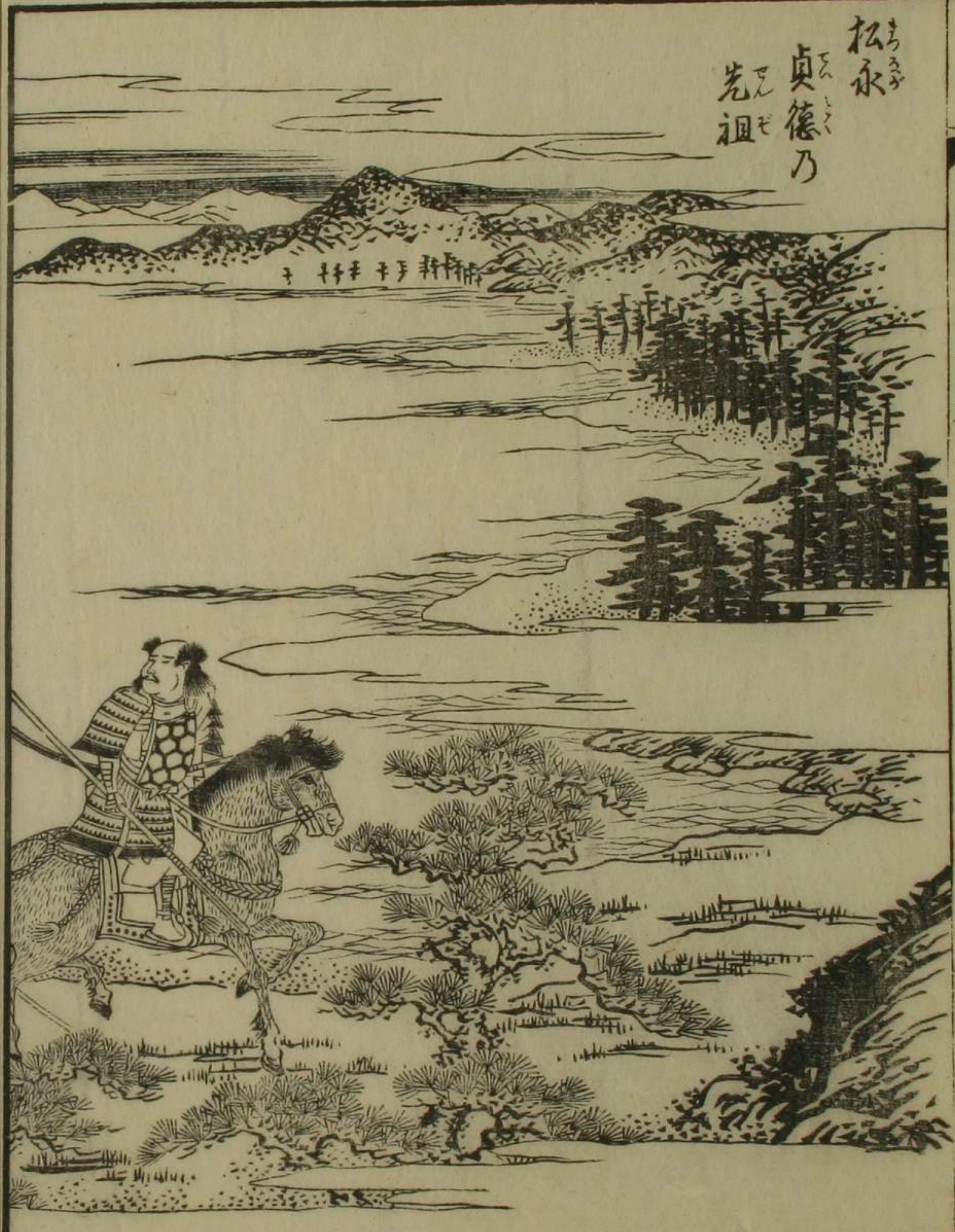


信  
山  
城



虎の羊と追ふ事ありて松永遙より見く是必は重幸が勢  
ろくえんけ方より討く出播合せて折崩せしと嫡子久道  
又三子余の遺率と授け城戸圍ひ討出たり考ふる諸  
軍先と見く八方より是圍と鎗ふとまを他門と突まは  
城兵討り若敷と考りて珍本が勢ハ何れもあつてと  
目と配つて見巡とも是と石と勢と配しき兵も見へ  
附は城中心へ入る朝神城尾のあ人又十余人の在勢又  
中知し美倉小屋く一日は火と放てが極火八方に配  
り建烟を中へ濃ち殺しきりのえ方は其火の下より  
周と他門と斬ぬれ城中心の鼎の漏るく喚き叫ぶ身  
方より八面より考ふるの大軍一日は火より城戸と破つて

込へおふ松永彈正今に叶ふがれたる換りてと天守は  
より中より火と放り自害して配しより考る松永は  
智あきとも考る謀と考せとも又曲りされが邪謀と  
て一たび天下の紙捲りしりも急信まらとの烟ときて  
家名永く彭城也しり積悪を道の志りしり考るらば  
然中まら永福年間三奴が軍國我の附南都大佛殿と  
焼立水義の勝利と得たりしり十月十日の夜かりけを  
今月今日月日も月日十月十日猛火の中へ配しり深  
くて靈佛靈場と焼出たりし佛とも法とも願ふる自業自  
得の感どうを考るらばしり恐る考るらばしり是とみても私  
按は當時信長と威と海内は振ひ橙と州郡は布て内



松永  
貞徳乃  
先祖

画本傳書御三繪

大尾の石大尾は昇進し天下と三分あり其二ツと保ち専ら  
 仁惠と氏を施し國家の平安とこそ教ひ給ふなれば唯ふ合  
 然とこの人々を教ふるやと教ひ給ひて聖徳太子の仰命の  
 靈地なる石山本願寺と滅亡せしむんと數年の回軍馬と勃  
 し如毒の靈場は向ひ鉄砲を射信信數萬戮ひて死し然と  
 懐ら者密信万とて教と知るべし松永が大佛殿を焼く  
 是より於佛罰の深重なるべし神必の終りこそ危うく是  
 と心を著るは皆眉といそめてそやきたるは時松永が嫡子右  
 衛門佐久道の落城ありありとさまと見ん又が美祿の隙とも  
 一方と切破り然とも見んて落城しが中國(志)のびたり  
 長門國は深きくしが其縁に永種といふ者あり永種は

と松永貞徳と号し世よ名をえり謝人あり

信長需和申願寺事

日月十三日城々助信忠御軍馬とまどり上洛し給へり藤庭  
 にも今度凶徒等容易退治せしむる糸津妙の旨歎感あり  
 三條中將は任じ給へ信忠御恩と謝し十七日都と立て去  
 乃城へ降陣ありけるを信長は信長公諸國の然歎向ふと云  
 ざる者ありて征とれは忽降り勢ひまじく整へり此  
 只石山本願寺の事又伏し居るを信長は信長公諸國の然歎向ふと云  
 度又味方放軍して傷死乃若ありて信長は信長公諸國の然歎向ふと云  
 山を夷敷んとさましく思ふとめざし給へり藤庭の毛利  
 家より石山へ兵糧と介こそ奇怪り先中國と押入り後





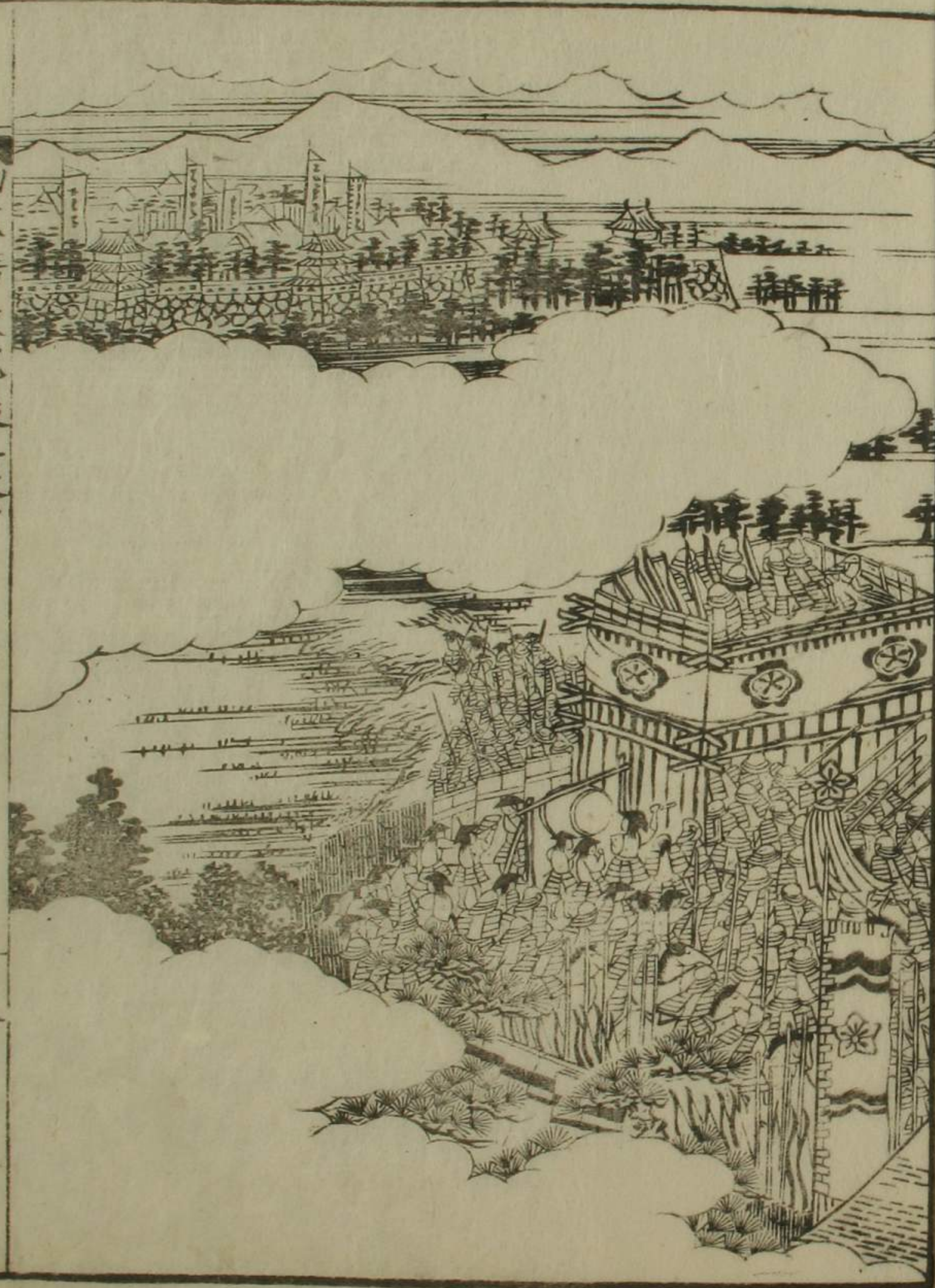
信長云  
石山黄  
評議



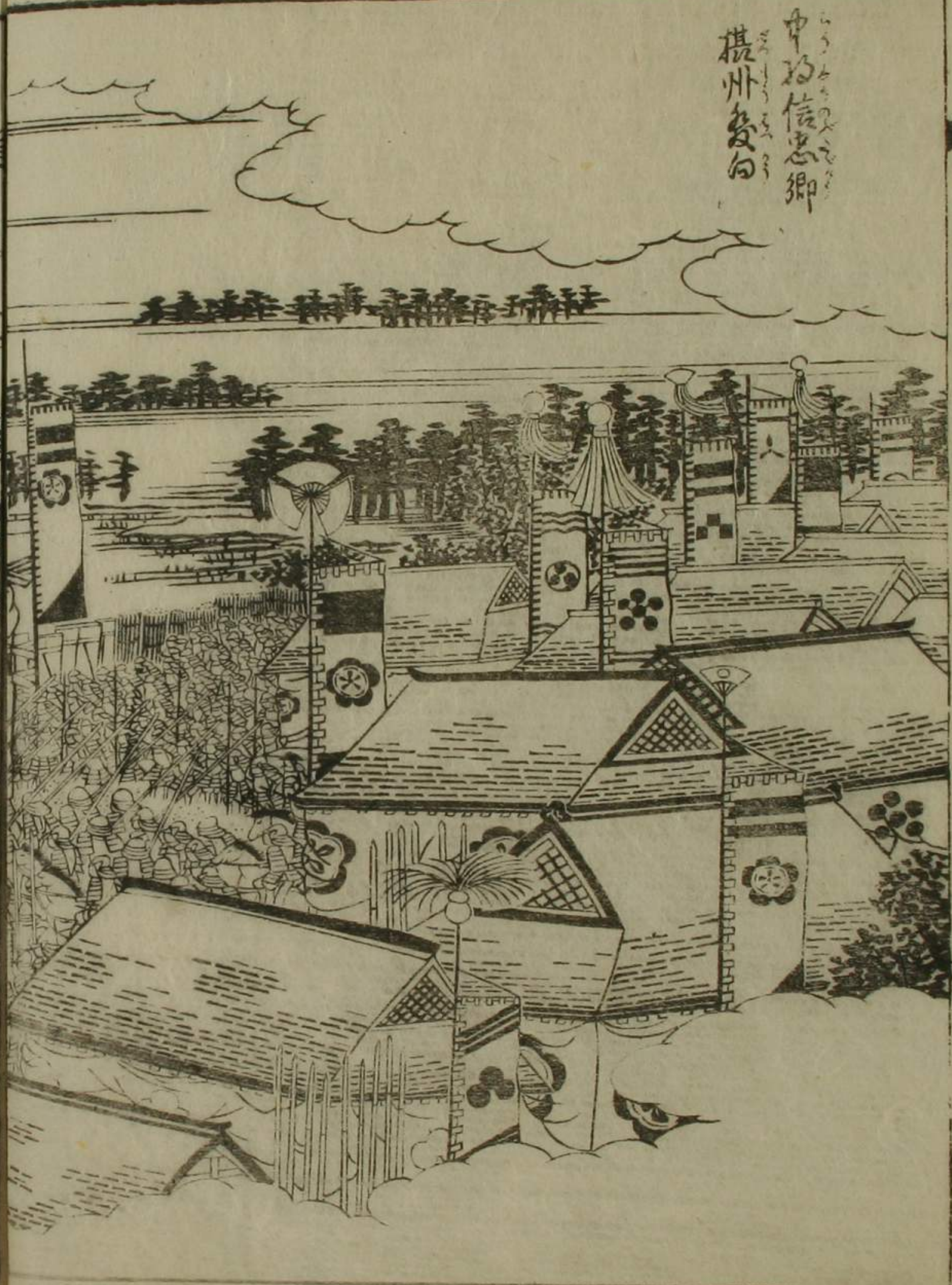
石山と丸田兵糧と喊して責を以てせしと抄下し石山羽柴藤  
若守承の若くは播磨一國と揚子毛利退治の先をうらんき  
命に給ふべき者若くは播磨で恩と謝し十月廿三日安土をきて  
播州へ進發せり其年もはしきりて書さす明とて天正  
六年去二月内府信長を重て石山を責らるべき系評を  
し給ふは播磨中お信忠郷今度の討ひを給へ給ふより信  
長も則ちと免し給ひ信忠郷とて無えおとほし相とて  
人々もは令分小田信雄郷三男神部信孝郷小田上野女  
信包津田源三郎勝長惟信又郎丸勝門村涉川花迫お監  
輝登兵庫次明智日向守若くは軍おとして尾州浪州に  
州若州其外家内乃軍兵と修し集り其勢都合六万余人

石山乃に面八隅と鉄桶のどく丸田と舟樓と組上げ芝を  
と築楠竹葉と樹立く喚き味で責より多るおびはし  
きおとま之城中より矢急く塙の役同又大竹石火矢  
火箭妨格弓槍長柄といしくと並びて責より多る款と討崩  
し塙際近く来る若と長柄とて突進し若くは謀計を  
及け是と責は城中の術と智て防ぎ幾人殺し互方死  
ん負殺と去りて人々も為城とべき辨えよはしつ川果  
るれども是れぬ戦ひは信忠郷とはじり若子の人々中後ド  
られらるけ城要害堅固して中々急には責はし給ひ  
當時羽柴藤若守中國征伐として播州へ下向しつはは後  
毛利家其外西海の大名より兵糧を入りてあえりてはと

日本書紀卷之三十一



中乃信忠郷  
横州夏白



日本書紀卷之三十一

比上方の附城と増築き八方と芝出と勢の構へ諸方の  
 體素と堅く林のじうは城中へは六方と余の門後三月  
 の内より兵糧盡く盡れて落城せし力素ある人といふ  
 づに軍兵と費はのりてとてとてやるる功りまごころに其の上  
 城中へは給本重率よく軍法に通じ筑城の門後守る所  
 多量のぞとと証し味方の兵士をやまごころ勢以て急な攻接  
 んるもいもあつたは皆一日もやたれ信忠御も突りやと  
 とととと先素口と三丁むり退き長蛇のぞとと陣とつ  
 孫合戦の次第を安去の城へ進進ある去程に内府信長とい  
 諸國の征伐率勢よく安去の居城はしつととも安去と孫  
 給へ向く國へ令と下し進て國政の執行に剛強く

ぞ刀入給へ時よ揚州表より信忠御の御後素にして石山合戦  
 のあさまと言はし城中強く急な落城の神をよし進進と  
 せば信長もし石山の美接難き不始とつとと給いつとと  
 と雖も給へよ當耐山陰山陽西國に國及び東國の心素氏政  
 勢強くとと諸國いよとと神強くつとと給へよ増法昨と款と  
 殺年軍馬と費しお率と安去より良給のおん給ひよつと  
 比今上方候とて一度中執寺と和勝をえ給ひ渠が勢ひ教  
 トカ長しき時と見合せ率よ討ては物りつとと是空は空和禽  
 と給るより安去とと心の内よ謀計と構へ荒本橋津守  
 矢部若七郎西人とと上候とと口とと乃給き委しく信忠  
 ら石山城へ進し給へ西人下知とと給へ橋津ととつとつと



辛卯寺評定

西本願寺評定

信忠卿の本陣は多り内府云の思ふと申し石山の城中へ  
 安去すりと後素との中と違し兵杖を留てお見え給ふを  
 き和入つらりと人執て諸門下と集めけりを降遂し  
 給ふは鈴木重幸大さふ多入く信長出陣と長神と  
 悔り頼り又軍馬とともめ責崩さんと斗きとも城中の  
 門徒多美実の忠義とともい務清して防ぎあるる信長  
 於になき御斗盡今悔りと構へ一人を歎んとともあつて  
 先石入く其口よみ成せ給へ飛りて是和勝と計んとの  
 後若ううん何よもい即尅の返着と沖遠あて衆  
 のと安し給へとやこれ一人是は日ど給ひ執て信長の  
 両使と城中へともめされたる荒本矢部の人正しく礼

服と長し後若終よ十人斗よて城中へ入来り一人は面  
 て主人信長一人へ中誠る給き小田と本報寺のあふ年  
 楠よ及び多年乃合我勝負を争ふ互よ何の給えと  
 つらつを知り原素両家にお眼むきるるては去る年  
 信長三奴征伐のる攝州後將よ在陣せし時本報寺謀  
 計とて信長と後頼り又御戦とつらく教罰と給る  
 安とてはじめく小田と本報寺國年の基とみせり信世  
 の形勢と考るおせとまび死と悲しむい情ある者の天性  
 然ると給えりなき事戦よ多くの人馬と傷いひまれり  
 軍卒と若めんり寔よ不仁の甚き不業よけり信や私よ  
 ころよ信長の武家に生さ征伐と給ふをてよい重とと保



荒木矢部長吉

じなり下万民の去炭を般ひ衆と後世と得るトし既  
 而し只奉教寺上人と於ろや何ぞ俗人といづく戰場  
 修羅の國津と好も好もや信長佛の意といまご知れ  
 と人とも怒らうい如來の祈言願又遠い終りんを是必  
 道長又の門後の軍と人を誘ひ乱とるさんと企るもの  
 なるべし安とんて双方奉來の眼も忘る承く和賤と結  
 西家水魚の交とるさんと人許密し終るるい當座の  
 引出物として承く八本又万石と進し和泉河内兩國の内は於  
 て二三郷乃地と承く寄附とんき同屋との地へ奉建立  
 ろく當石山と用き終るよ抄ひうい朝廷への忠義万民の歎  
 何ゆが是又好も好もこれん切て使者とんて徹意と告るる

かく乃てと謹で演まらると人足を圓せ終るい誠又信長の  
 所存分殊勝乃浄事又覺は我僧の身としういそり我  
 を好も天下の私と歎んやえより邦國と奉軍も承を  
 只當宗旨の承く漸減せんを恐る止り終るは防我  
 又及ぶのそわり使者乃面く暫附客殿と立く相へり門  
 下の石依と相議と返し終て返善ヤトしと終るし荒本  
 矢部の商人浄をよいと客殿又退き体足してあけは  
 山海乃滋味とつる祿郷食應いも町寧方り

繪本拾遺信長記後篇卷之三終



馬本傳長壽後三卷

十一

?

